

日本語を歌うときの罫

Areki Mizuno

水野 亜歴

奈良教育大学音楽教育講座

日本語を歌うときの罣

奈良教育大学 音楽教育講座 水野 亜歴

1. はじめに

皆さんは音楽の授業で様々な国の歌を聴いたり歌ったりした経験があるかと思いますが、授業で扱われた歌唱教材のほとんどは日本語の歌であったでしょう。しかし、どれほどの人が日本語の特性について理解したうえで歌っているのでしょうか。今回は日本語のうたを歌う際に特に気をつけたい3つの罣について述べていきたいと思います。

2. 一つ目の罣「ひらがな」

皆さんは初めて歌う曲を練習するとき、まずどのようなことから始めますか。旋律をピアノで弾いたり、CDやYouTubeで聴いてみる人もいれば、詩をじっくり読む人もいるでしょう。色々なアプローチの仕方があると思いますが、必ず行って欲しいことがあります。それは「詩」をじっくり読んで、イメージすることです。学校の授業を思い出してみてください。歌う前に、まず詩の内容を理解するところから始めたと思います。それだけ詩をよく読み、詩の内容や何を訴えているのかをイメージすることは大切なことです。

しかし、ここに注意したい「一つ目の罣」が潜んでいます。詩を読むときに五線譜の下に書かれた文字を読んでいませんか。詩を読むときはまず原詩を見ることが大切です。日本語は一音節だけでは情報を伝えられません¹⁾。「お」「ん」「が」「く」のように複数の音節がつながることで「音楽」というように意味が伝わります。

譜例 1 を見てみましょう。吉丸一昌の詩に作曲家の中田章が曲をつけた《早春賦》という曲の歌い出し部分です。譜例 1 を見てわかるように、楽譜上ではほとんどの文字がひらがなで音符 1 音ずつに当てられていることが多いです。これでは「詩」の意味をスムーズに読み解くことが出来ません。

譜例 1



は る は な の み の

次の「ひらがな」で書かれた文章と「原詩」を見比べてみましょう。

春	は
は	る
名	は
の	な
み	の
の	み
	の

同じ文章でも、目から入ってくる印象がまったく違うように感じませんか。右側のひらがなだけで書かれた詩は、文章の区切りが非常に分かりにくく、正確に内容を理解することが難しくなります。加えて漢字で「春」「名」と書いてあれば意味が分かりますが、ひらがなのみでは「春花の実の」なのか「春は菜のみの」なのか、いろいろな言葉が想像できてしまいます。しかし、原詩を理解しておけば、五線譜に書かれた言葉の流れに自然と気が付くことができるでしょう。

このように日本語は、複数の音節がつながって初めて意味を伝えることができ、漢字やひらがな、カタカナ等を使用し微妙な感情を表現しているのです。そのため「詩」を読むには、五線譜の音符に割り当てられた文字をたどるのではなく、原詩を見て読むことが大切です。

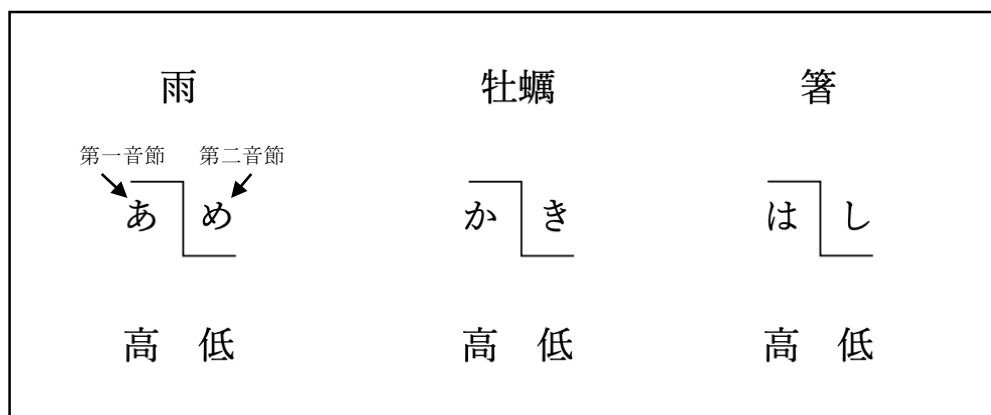
3. 二つ目の罨「アクセント」

さて、先ほどは演奏者の視点での話をしましたが、聴き手の立場になって考えてみると、歌詞カードや字幕が無い限り「詩」を見ずに演奏者の歌から詩の内容を聴き取らなければなりません。聴き手は何を手がかりに言葉の意味を把握するのでしょうか。次の文を声に出して読んでみてください。

友達から、かきを貰った。

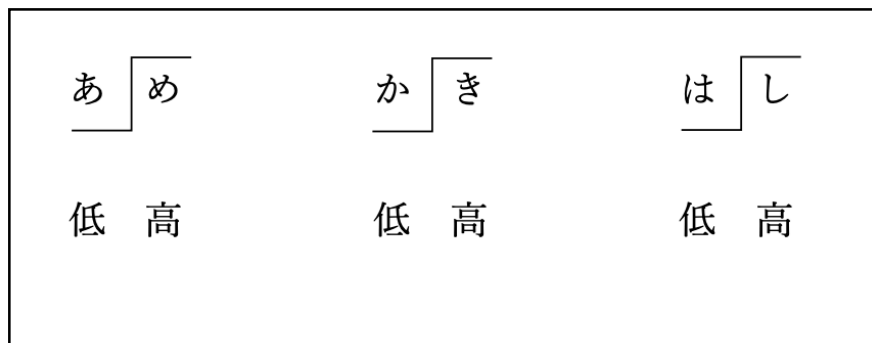
「牡蠣」か「柿」で迷いませんでしたか。ひらがなではどの言葉なのか判断に困ります。しかし読んでいて気が付いたことがあると思います。読むときに第二音節を上げて読むか下げて読むかで意味が変わってきます。図1を見てみましょう。「雨」「牡蠣」「箸」はすべて第二音節が下がっています。

図1



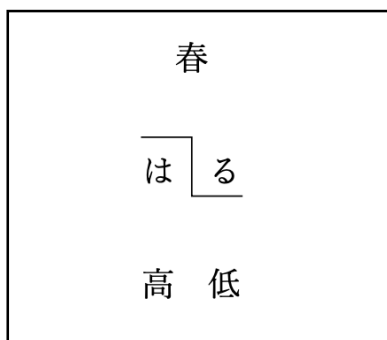
今度は、図1の言葉のアクセントを逆にした図2を読んでみましょう。

図2



おそらく「飴」「柿」「橋」といった言葉を想像したと思います。これは西欧語にみられる強勢アクセント（＝強弱アクセント）とは違い、基本的に音節は同じ強さと長さで音の高低によって言葉を判別するという日本語の特性のひとつで高低アクセントと言います²⁾。ただし、高低アクセントの位置は地方によって異なります。また、第二音節が上がる場合は第一音節と第二音節は同等の価値として立て、第二音節が下がる場合、第一音節は立てますが、第二音節は軽くします³⁾。ここに罣が隠れています。譜例1をもう一度見てみましょう。歌いだしの「春」の高低アクセントは図3のようになります。

図3



この場合、第二音節は下がっているので「る」は軽く発音します。春の「は」は6拍目アウフタクト（弱拍）、「る」は1拍目に書かれています。何も考えずに歌うとアウフタクトにくる「は」を弱くし、強拍である1拍目の「る」は強

く発音することになります。するとどうでしょう。先述した説明と真逆の事が起きてしまいます。日本語を美しく歌うことを優先するのであれば、「は」は弱めず言葉を立て、「る」を強くしすぎず軽く発音する工夫が必要です。また、旋律の高低が逆になっていることにも注意しましょう。

4. 三つ目の罨「助詞」

日本語の助詞は強めて発音しない方が良いと言われています⁴⁾。自分の知っている歌で良いので、助詞を強めて歌ってみてください。歌が全体的に稚拙に聴こえませんか。では助詞を力まず歌ってみるとどうでしょう。違いがわかると思います。私の経験上、「が」「は」のような母音が a で発音される助詞の場合、母音自体が響きやすいので、助詞が大きく聞こえてしまいがちです。よく注意しましょう。

5. おわりに

日本語を歌うときの罨について、特性を例に簡単に3つ述べてきました。もちろん大切なことは他にもたくさんありますが、これは私自身が歌う際に最も心掛けていることです。今回紹介した「罨」を知ることで、歌うことや聴くことがより一層楽しく感じられるでしょう。そして、その先にある自分なりの解釈をまた探してみてください。

参考文献

- 1) 大賀寛 (2005) 「概論」『解説付・日本歌曲選集1』全音楽譜出版社, p.9
- 2) 同上, p.11
- 3) 大賀寛 (2014) 「第四章 日本語唱法」『～心を伝える日本語唱法～美しい日本語を歌う』カワイ出版, p.75
- 4) 武田雅博 (2015) 「第3章 日本語が美しく聞こえる歌い方」『必ず役立つ 合唱の本 日本語作品編』株式会社ヤマハミュージックメディア, p.47

水野 亜歴 (Mizuno Areki)

- 2013年 東京音楽大学大学院 声楽専攻 独唱研究領域
修士課程修了 (音楽修士)
- 2013年 東京音楽大学 非常勤助手
- 2017年 奈良教育大学 音楽教育講座 特任講師
- 2018年 奈良教育大学 音楽教育講座 専任講師
- 2019年 奈良教育大学 音楽教育講座 准教授



【研究テーマ】 学生時代からオペラやイタリア歌曲を中心に演奏法研究を行ってきました。最近では日本語の特性に着目し、日本語のうたの演奏法について研究をしています。日本語は普段使い慣れている母国語ですが、外国人に教えると仮定して考えてみると、意外と教えられないものです。

【趣味】 散歩です。奈良公園の近くに住んでいることもあり、時間ができれば散歩しています。

【今の研究分野を選択したきっかけ】

父が声楽家で、音楽は生活の一部でした。中学生の頃に行った演奏会で、父の歌を楽しそうに聴いている観客の姿を見て、歌の力に感動したのがきっかけです。

[日本語を歌うときの罫]

著者 みずの あれき
水野 亜歴

2021年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>